

「特性」というものは、過去から現在までを現し、「癖」というものは、現在から未来を司るものです。すなわち、過去なるが故に、特性は変化し難く、未来故に癖は改め得るのです。全肯定とは、文字通り、そのすべてを肯定することです。特性については諦め、癖については、それを改変しようと努力する、その一切があるがままに許容するその姿です。すなわち、自分および人間のあるがままの姿を受け入れるのであります。

## 全肯定

ドイツの哲学者、ショーペンハウエルの言葉に「底荷を積んでない船は不安定である。それはますます進まないであろう」という言葉があります。

これは、ある程度の心配や苦痛や苦労は誰れにもあり、それはむしろ必要でさえあるのだ、といっているものと思われれます。

「心配?」「苦痛?」

「そりゃあって当然。それは生きている証拠で、むしろよかった」とこういう見方をしているのです。

これに対して、徳川家康のいったといわれる有名な言葉に「人の一生は重き荷を背負いて、遠き道を行くが如し」というのがありますが、これも前者のショーペンハウエルと同じ意味のことをいっていると思われれます。ただ、前者は、船の底荷(心労)は必要であるといっている肯定的であるのに対し、後者のそれは、やや詠嘆調であり、否定的でもあるのですが、それにしても、この両者は、人生において、心配、苦悩のような否定的な要素はあって当然とそれらを受け入れていることです。

これは両者がそれらの存在に対して、肯定的であることを示しております。

この肯定とは、つまり「人為的なものには完全はない」ということを示しているものです。

芸術家やスポーツマン、また事業家は、怒り、不満、飢え、怖れなどの否定的感情をかえって、創造的エネルギーに変えて、大きな飛躍発展することがあります。

私の知っている著名な小説家は、まず借金をして、高価なものを買ったり、贅沢をしてしまうのだそうです。そして、その借金に迫られて、それを創作の原動力とするのだといえます。この場合、彼はある程度の苦痛を自分の身に課しているともいえます。

結論としていえば、「この世はすべてがあるがまま」の見方も、時には必要だということですが、

これは「全肯定」の心的態度であり、「べきとべからずのはからの意識」を捨てた世界であり、すなわち「空観」そのものであります。

そこは、絶対とか相対とかの対立さえ空(くう)じられた、「無、無、ム、ム、ム」と絶句閉口した境地です。すなわち、一語でもあれば、即、崩れ去ってしまう「尽大地(じんたいち)一ひとなめの塵(ちり)さえも残されない、まっさらの超絶の処なのであります。

この地に至れば、それはもう理想の地に達したことであり、これを仏教の方では「成道(じょうどう)」を得た、または「成仏(じょうぶつ)」となり得たのよう表現するのですが、勿論、私たち凡人が一気にそのような境涯に達する筈はなく、これはその理想を目指し、日々精進する菩薩行こそ、私たちの勤めとするところです。

ここで次の引用文を読んでみましょう。